

## 中世の兵の跡

「摂津国源氏松山は、香下城をこしらえて南方に牒し合わせ、播磨路を差し塞いで人を通さず」これは南北朝時代をテーマにした軍記物「太平記」にみえる康安元(1361)年冬ごろの記録です。三輪地区の土豪で源氏ゆかりの松山氏が南朝(後醍醐天皇)方に属して香下に城を築き、播磨から進出する北朝(足利氏)方の軍勢を防いだというものです。実際には観応元(1350)年の時点で、香下城は北朝の支配下にあったことが別の記録で確認できます。香下城をめぐる南北朝の激しい攻防が繰り返されたのです。ちなみにこれらの記事は、文献に具体的に記された市域で最古の城の記録です。



県道 68 号線から見た羽束山(香下城跡)  
※くじらの形に似ています

南北朝時代以降、市域は長い動乱の時代を迎えます。その過程で市域の各所に山城が築かれました。市史によると現在明確に確認できる城跡は、羽束山はつかさんの山中など35カ所にもなります。摂津・播磨・丹波の接点に位置する三田盆地は、京都・大阪方面へ進出を目指す勢力とそれを防御する側との接点でした。続く室町時代には播磨から台頭した赤松氏の一族が有馬氏を名乗り、三田を拠点に独自の支配圏を確立します。

戦国時代末期、有馬氏に代わって三田に拠点を置いたのが、伊丹に本拠を構えた荒木氏の一族です。三木の別所氏らとともに中国地方の毛利氏もうりに呼応した荒木氏は、織田信長や羽柴秀吉らと熾烈な戦いを繰り返します。三田も例外ではなく、織田方が築いた道場河原や三本松(ともに神戸市北区内)の城を拠点とした秀吉勢に包囲される中で、天正7(1579)年頃に荒木氏の「さんだの城」は落城します。織田信長の一代記として有名な「信長公記」しんちょうこうきに記されたこの記録は、三田の地名が「さんだ」と発音されたことを示す最古の資料でもあります。

羽柴秀吉の支配下となった三田城は、天正8(1580)年ごろに兵庫城(神戸市兵庫区)とともに甥の秀次ひでつぐが接收します。その後、秀吉の天下統一政策のもと、三田城には山崎氏が大名として配置され、新しい時代が幕を開くのです。